

研究所での学びについて語り合う

中山 弘樹
高橋 美嘉

畠山 哲
馬場かおり

前田 全俊
北沢 賢悟

1 研究所の研修で感じたこと

畠山：自身の振り返りや学び合いという観点からこれまでの1年次研修を振り返って、どんなことを感じましたか。

中山：昨年度、私が担任していたクラスに人が嫌がることをしているようにみえた子がいました。私は、そういう子の問題行動を改善する「方法」が知りたくて研究所に来ました。研修を通して私が一番印象に残っているのは、佐伯所長の「子どもはみな、よりよく生きようとしている」という言葉です。その言葉をもとに私が問題だと思っていた行為を振り返ると、なぜその行動をとったのかというその子なりの思いが感じられたんです。子どもに対する自分のとらえが変わったことが、私にとって一番の収穫ですね。



高橋：すごくわかります！私は学習が苦手な子どもへの教え方を研究しようとここへきたんです。月2回あるテーマ研究会で、私は、私の支援によって子どもが思いを伝えられるようになったと感じた事例を出しました。しかし、研究会で「先生が支援する前から、こんなにも自分の思いを伝えている子どもの姿があるじゃないか」という意見を聞きました。私は、子どもを「助けてあげなければいけない存在」だと思っていたんです。それは、子どもを私より下に見ていたからだという事に気づいて、とてもショックでした。私は、子どもへの教え方を研究するよりも、子どもが何を願っているのかをわかる自分になりたいと思いました。

畠山：私も高橋先生と同じようにショックだったことがありましたよ。これまでの私は、子どもを集団として見ていました。集団をよくすることが私のゴールみた

いなところがあったんです。所長講義の中で佐伯所長に、私のレポートは、「子どもたち」という言葉が多く「三人称的ですね」と指摘いただいたことがありました。私は、子どもの思いに心を寄せて考えていたつもりでしたが、その子を私や集団の考え方にのせるみたいところがあったのだと痛感し、それがものすごくショックでした。子ども一人一人をじっくりみてこなかった自分に気がつきました。

馬場：子どもを集団としてみていたというのですが、2年次研究会や学校参観を通して、2年次の先生方が、個を大事にされているのをすごく感じました。先生が個を大事にすることがクラス全体に広がっていくという感じですかね。これまでの私は集団を意識しすぎて、個に我慢させるような感覚で子どもと接していたことに気がつきました。



前田：私も先輩方の研究発表会から学ばせていただきました。私は今まで、生活科でヤギやポニーの飼育活動をしてきました。子どもが動物への思いやりや飼育のための技能を身につけるにはどうすればよいかを考えていました。3年次の先生方の発表を聞かせていただく中で、動物に思いを寄せる子どもと向き合う教師のあり方について深く考えさせられました。研究会での学び合いを通して、先輩方のレポートや発言から、これまで自分にはなかった子どものとらえ方を学ばせていただいていると思います。

北沢：テーマ研究会に加えて、『信州総合学習の源流』にある淀川茂重先生の実践は、私にとって衝撃でした。子どもや子どもを取り巻く環境を、丹念にみる淀川先生の温かいまなざしを感じました。およそ100年も前の実践ですが、「子どもをみる」ことや、子どもの生活をつみとめる大切さを教えていただいたように思

います。淀川先生から感じたまなざしを、心に留めておきたいです。

畠山：これまでの自分になかった考えにたくさん触れて、驚くことも多かったですね。凝り固まっていた教師としての自分を変えるきっかけをいただいているように思いますね。

2 実習からみえてきたこと

畠山：これまでの振り返りから課題をもち、11月には実習に行ってきましたが、いかがでしたか。

前田：国語の授業で、前日の学習で疑問に残ったことを考えようとしても、子どもの意識は次の日には変わっていました。子どもが考えたいことがどんどん変わっていくので、私のやりたい方向にこだわって、授業を引っ張ろうとすると、子どもの思いとどんどん離れてしまうと感じました。

馬場：私も同じことを感じました。国語で、子どもの書いた初発の感想を基に私なりに考えた発問をワークシートにしても、いざ授業をすると、その瞬間子どもの考えたいことや思いと、ワークシートの発問とが違っているということがありました。途中から、子どもと場面を確かめる中で出てきた考えと初発の感想とを絡ませながら発問を考えるようにしました。焦点化しきれていない発問になってしまうこともあったのですが、細かいねらいというより、大きなねらいをもっていれば、子どもの考えとねらいが近づいてくるような気がした瞬間もありました。

北沢：私が今強く感じていることなのですが、子どもの意識の中では「今」考えたいと思っていることがあると思うんです。こちらの思い描くスモールステップで、こちらの思い描くゴールにたどり着かせたくなくなってしまいうんですけど、子どもの願うステップ、学びたいことはそうではないかもしれないし、一人一人違うのだと感じることが増えました。

高橋：私の場合、道徳の授業で、教材のねらいに「みんなが気持ちよくなるためにどうすればよいかを考える」があり、最



後にはねらいに集約させたいと思って授業をしていました。しかし、ある子が「みんなのことよりもまずは自分のことを考えてしまうことがあるかもしれない」と最後まで迷っていました。私は、実習で子どもの思いに目を向けたいと思っていたはずなのに、私の思いを優先させていたことに気づきました。その子の思い

を受けとめることの難しさを改めて思い知らされました。

畠山：私は、その子の思いに寄りそいたいという気持ちで、中学校での実習に向かいました。そんな気持ちが芽生えてきたからなのか、課題に取り組む子どもの姿に、その子の意欲を感じました。自然と私の気持ちがその子に向いていたような気がしていたのです。様々な授業で、その子が自分に必要な言葉を呟きながら取り組んでいるので、私は、「すごいなあ」と声を掛けました。しかしその子は、「すごくない」と言って私の言葉を受け入れませんでした。私自身は、その子の思いに寄りそえたんじゃなかなと感じていたのですが、改めて振り返ってみると、私の言葉は、その子が私に感じてほしかったこととかけ離れていたことに気づきました。私はまだまだ、その子の思いに入り込めていなかったと感じました。

前田：その子の思いを感じるということにかかわって、自然に劇が始まった国語の授業がありました。私には劇をやる想定



はありませんでしたが、子どもは劇にすることで場面をつかみたいのかなと思い、軌道修正しました。劇から私も一緒に考えていきたい、言葉や行為に表れる思いを感じたいという気持ちの変化がありました。

中山：保育園で実習させていただきました。手遊び歌を楽しんでいる場面で、ほとんど動かない子がいました。私は、子どもが手遊び歌を楽しむ姿とは、全身を活発に動かして大きな声で歌う姿だと思い込んでいました。しかし、振り返りで「子どもによって楽しみの表現は違う。自分がイメージしている『子どもが楽しむ』という姿にその子を当てはめようとしているのではないか」という意見をいただいてハッとしました。再度ビデオを見返すと、その子はほとんど動かなかったけれど笑顔なんですよ。その子は、友だちの動きをみて、あるいは友だちの動きを真似して心から楽しんでいたのではないかと思うようになりました。これまでの研修から、自分を変えよう、変えたいと思って実習に臨んだのですが、言葉や行動は変えられても、根本的な意識を変えるというのはそう簡単なことではないと実感させられました。

北沢：私も、自分を変えることの難しさに、とても共感します。授業での発問、子どもの発言のとらえ、ありとあらゆる場面で、自分の考えに無意識の内に染み込んでいる、「こうしなければならない」というような



ものがあるんですよね。一度自分にとっての当たり前を疑ってみたいと思うようになりました。

3 これからについて

畠山：最後になります。現在、変化の途上にある私たちですが、研究所での学びとこれからの自分についてお願いします。

中山：子どもの思いに目を向けることは大事だと思うのですが、「この子はこのときこう思っていたのではないか」で終わってはいけないと思うんですよね。私の思い込みかもしれないじゃないですか。だから子どもの思いを考え続けていかなければいけないと思うんです。それから先ほど話した「子どもが楽しむ姿」について、自分が当たり前だと思い込んでいることでも、問い直していく必要があると感じています。子どものことも自分自身のことも問い続けていけるような自分でありたいと思います。

前田：私の課題は、子どもの思いを感じて、共に追究していくことです。中山先生の問い続けるということと似ていますが、一つの見方で、こうだと決めつけて進んでいくことではなくて、その子はこう学びたいと思っているのかも知れないという予想を、たくさん自分の中で考えられることが大事なと思います。そのうえで、課題が生まれたときにどう考えたいのかという子どもの思いを、私も毎日考えていきたいと思います。毎日の子どもの姿にヒントがあると思います。

畠山：私は、意図的というより、自然に



というか、その子に対して「本気」になりたいと思っています。クラスに入っ

たという感覚です。その子に寄りそって感じ続けたい、考え続けたいというのが今の思いです。

高橋：私は、どうしても私の思いを優先し、子どもを何とかしてあげなければという思いで動いてしまうところが課題です。まずは子どもの言葉を聞くこと、そして一度子どもの思いに立って考えたうえで、自分の思いを伝えるべきときには伝えていきたいです。

馬場：自分の思いを伝えることは私も大事だと思います。実習で「子どもの考えを私の考えで左右しないように、誘導しないように」と思うと、言葉がけが曖昧になってしまった気がします。自分の思いを伝えることも大事だし、バランスというか加減が難しいと思います。研究所を出たからといって、スーパーマンになれるわけでもなく、劇的に変わるわけでもないけれど、じわじわでも確実に変わっていければいいと思っています。

北沢：子どもは一人の人間としてその時間を生きているのに、私はこれまでの経験から全てを予想して準備して、子どもを



そこに当てはめようとしていたと思うんです。「この子は何でそんなことを言うんだろう?」と思ったときに、率直に「何で?」と聞いてもいい。「ちょっと待てよ」という沈黙があってもいい。こうすればいいという方法ではなく、「子どもの生きるその時間を一緒に生きたい」と思うようになってきたと感じます。そう思うと、子どもと一緒に生きる自分も、教師として今を生きるのがもっと楽しくなってきたように感じます。

畠山：皆さんのお話を聞いていて思ったのですが、子どもを自分に寄せようと思っていたのが、その子どもが思っていることに自分が寄るような、そんな感じかなと思っています。

研究所での研修も、もう残りわずかですが、4月からの子どもとの向き合いに活かしていけるように、頑張っていきたいと思います。ありがとうございました。